

色覚に関する聞き取り調査

回答者 50代 瀬戸内地方在住の男性

文責 調査員

調査日 2015年春

『色盲なんか怖くないよ』

我が子に語った父の言葉

幼少の記憶

幼いころ、朱色は赤色の薄色と思っていました。そのため赤色を薄く塗れば朱色になると思っていました。また、茶色は赤色の濃い色、紫は青の濃い色だと思っていました。紺色も青の濃い色だと思っていました。保育所で、ある日、うさぎの目を（赤色でなく）茶色に塗り、「〇〇君のうさぎちゃんは外国のうさぎね」と保母さんに言われたことがあります。母親に「茶色に塗っている」と指摘されたとき、「何がいけないのか」と思いました。

小学校の記憶

一番嫌いだったのは、小学校の公開色盲検査の時間でした。先生の前にならんで、順番が来たら色盲検査のためにラインなどを指摘する検査でした。自分にだけラインが見えず、指し示すことができません。「なんで見えないのー」と囃したてられました。皆の前でさらし者になり、最も逃げ出したい時間でした。当時は自分が悪いのだと思いました。

小学校の美術の時間は辛い時間でした。「そんな色はない」、「そんな色はしていない」と言われ続けていました。絵を描く時間は地獄でした。そのような中で嬉しいできごとが2回だけありました。

小学校5年生の時、美術の授業で、見たままに風景画を描きました。山をバックにした家を描いたものでした。ところが、他の人（色盲ではない人）には独創的な色使いだったようで、高く評価されました。しかし、私が描く様子をつぶさに見ていた友人は、色使いをでたらめに描いたものが大当たりしただけだ、という評価を下しました。いきいきとしたものだったようです。風景画と思えないような躍動感がある、と言われました。私自身はそんなことを意図していませんでした。

小学校6年生の時には、島にある造船所のフォークリフトを描いたところ褒められました。特に、地元では絵画指導で一番と言われていた先生に、「この子は絵が描ける子だなあ」と言われました。

今思えば、構図がきまっていたから褒められたのだと思います。色が褒められたのだとは

思いません。しかし数少ない褒められた経験が当時は舞い上がるほど嬉しかったのです。

中学校の記憶

中学校 1 年生の時、美術の教師をしている先生が担任の先生でした。「あの子は、頭はいいのに絵は絶対描けない、かたわだ」、と面談で先生が母に言いました。母は私に直接この言葉を伝えました。私はノックアウトされました。小学校 6 年生の経験で得た勇気と自信が木端微塵になりました。

その先生に悪意があったわけではないと思います。後日ブロンズ像で塑像を作った際には高く評価してくれました。ただ私の能力の不均衡な面を無頓着かつ率直に言ったのだと思います。沈みました。

自分では「自分がかたわだ」と思っていたので、「何をいまさら」と思いました。母も怒りのやり場がなかったのだと思います。でも母の悔しそうな感情を自分ではどうしようもできません。そこに絶望を感じました。母は私に言うべきではなかったと思います。私は「言われたってどうしようもない」と思いました。それでもやはり、母も悔しかったのだと思います。

当時の自分は、小学校 5 年、6 年の経験から、色が識別できないことと絵を描く才能がない、というのは別であると考えようになっていました。つまり、自分は、色は識別できないけれど絵を描く才能はあると思っていました。この考えが中学校一年生の時に粉碎されました。

粉碎された気持ちから、なんとかして生き延びなければなりません。今思えば、色ではなく構図で自分は独創的なセンスをアピールする必要があると当時の私は考えたようです。

美術の先生は三年間同じでした。「かたわ」と言われたままでいるのが悔しく、何とかして才能を認めさせたいと思っていました。中学校 2 年生の時にはブロンズ像が、中学校三年生の時にはポスターが先生に褒められました。「自分がかたわではない」、と自分では証明したと思っています。中学校の美術の時間は壮絶な自己証明の戦いでした。よせばいいのに、私は勝とうとしました。ここで負けてはいけない、と思っていました。

美術の先生が悪の権化だったとは全く思いません。その先生はその先生なりに熱心でした。先生なりに、学力も人格もバランスのとれた成長をすべきだ、ということ言うために「かたわ」という刺激的なことを言ったのだと思います。その先生は、美術的に見た指摘をしたのだと思いますが、それは自分の努力ではどうにもならないことでした。

このように、中学生の頃、私は非常に自己否定的な感情を持っていました。それはあきらめにも近い宿命的なものでした。転機はふとしたきっかけで訪れました。中学三年生の時でした。

数学の先生も色盲であることを知りました。なにかの話題で色盲の話になったのでした。当時、「色がよくわからない」ということを自虐的に口にするにはできるようになっていました。隠そうとしても（公開の色覚検査のために）みんなが知っていることだったからです。その時、その先生も「自分もだ」と述べ、人口の5%程度は色盲であり、特に文化人に多いのだ、と教えられました。その頃の私は子供だったので極端から極端に発想が変わりました。自分は特権的なカテゴリーである文化人になれるかもしれない、と思いました。劣等感がたちまち優越感に裏返りました。その先生は明らかに私を励まそうとして言ってくれていました。「悪いことばかりではない、いいこともある」と伝えようとしてくれていました。色盲であることのアドバンテージを初めて教えてくれました。

自分が全否定されているわけではないと思いました。個性の一つとして相対化できるようになるきっかけを与えてくれました。当時180度変わったわけではありません。

先生の人柄もありました。さばけた明るい口調でした。もしも深刻に語られていたとしたら違っていただろうと思います。

この転機が訪れるまで、色盲であることは覆すことのできないディスアドバンテージでした。いまでは、取るに足りない不具合または不便、と考えるに至っています。それ以降は、「分からないから」と、さらりと言えるようになりました。

なにより、「自分がかたわではない」と、自己証明するために負けられない戦いを送っていた中学時代に出会った数学の先生の言葉は、天の啓示でした。自分のやっている試みを全肯定してくれるような温かさがありました。錯覚かもしれませんがそう思いました。

今現在も小学校、中学校で困っている子供は多いと思います。「そんなに気にすることないぜ」と伝えたいです。

家族との関係について

いま思えば、親がこの数学の先生のようにしてくれていたら、と思います。実は父親も色盲でした。同じようなメンタリティーがあったはずですが、役に立ちませんでした。家の中では、色盲の話は触れてはならないタブーでした。暗黙の了解がありました。

母の兄（伯父）も色盲でした。伯父は色盲検査の本を丸暗記して理系の大学に進学しましたが、その話を母がよくしていました。戦前、理系の大学には色盲の入学制限があったのです。ふつうでは手に入らない色盲検査の本ですが、伯父はどうかして手に入れ、丸暗記したようです。

私が就職活動をした当時もテレビ局（番組制作）の入社試験には色盲検査がありました。私はそんなものだと思っていました。

母は伯父の話を誇らし気に話していました。いずれ自分も社会的に類似したケースに出くわすことになるのだらうと思っていました。つまり、この社会で生きていくために自分は人並み以上のハンディを抱えている、ただしそれはやりよう次第でなんとかなる、と思って

いました。斜に構えていました。この世の中には面倒なバリアがある、賢く潜り抜ければいいと思っていました。特に 15、16 歳の頃まですごくしんどかったです。子供が十字架を背負った気分にいるのはよくありません。ねじ曲がります。「お前は这个世界でマイノリティーだ」「つけない職業がたくさんある」「異常だ」と決めつけられているのですから。

色の認識について考えていること

5 歳か 6 歳くらいで色の識別のために反復トレーニングをしていればもっと困らなかったと思います。24 色の区別を遊び感覚でトレーニングしていれば学校生活で困らなかつたはずだと思います。

色の区別が不器用なだけだと思います。色をカテゴライズするのが苦手なのだと思います。明暗や光のコントラストといった文脈を離れて色を認識できないのです。おそらく普遍的な概念で色を見ていないのだと思います。カテゴライズの仕方を教えてもらえばある程度はできるようになると思うのです。

取り入れるなら保育の段階が良いと思いますが、濃淡の違いとしてトレーニングすれば 24 色程度はその後使い分けることは可能と考えています。

絶対音感でない人がトレーニングで和音を学ぶように、美術教育でも色に関する教育があればよいと思います。何を赤と呼び、何を茶色と呼ぶか、本来それは共同主観でしかないので、それを突き崩すような客観的な教育が幼児期に必要と思います。幼児期が重要だと考える理由は、色を覚える時期であることと、深刻な劣等感を植え付けられる前の時期であることの 2 点からです。たとえば小学校の美術の授業の段階になってしまうと、「色の使い方が上手にできる、できない」という点で授業の成績評価にも関わるため、劣等感の形成につながってしまうと考えています。

色の認識と言葉の認識について

色盲、色盲でないという病気がばいばいです。早く走れる、早く走れない、というのは病気っぽくありません。文章を読んだときに、読めるのと読めないのは決定的な能力の差ではありません。

19 世紀、帆船の間での通信は旗流信号によってなされていました。つまりあらゆる信号が色で識別されていました。色を媒介してコミュニケーションする時代では劣った人間になるかもしれませんが、いまの我々の社会は色を媒介にする社会ではなく文字を媒介にする社会だから私は生き残っています。逆に、色の識別には鋭敏でも文字の認識については非常にアバウトな人がいたとしたら国語の問題というのは苦痛になります。

言葉の意味の違いを根本的に認識できない子がいるかもしれませんが、年月をかければ経験的にその差異はおそらく認識できるようになります。

色の違いを認識できないことと、言葉の意味の違いを認識できないことは同じことではないかと思います。

文字から豊かな想像力を発揮する子もいます。音から豊かな想像力を発揮する子もいます。色から豊かな想像力を発揮する子もいます。割合は、文字から豊かな想像力を発揮する子が多いと思います。でもそれ以外の子は、感受性は豊か、と言われても受験社会では不利になります。文字から想像力を発揮する子が有利になり、音や色から想像力を発揮する子が不利になります。人類の歴史を考えればそういうものだと思います。この世の成り立ちは根本的に絶対的な正義に基づいて成り立っているわけではありません。多数派の利害に基づいて成り立っています。マイノリティーだと決めつけられた人間は、生き延びる工夫をしなければならぬのだと思います。

インタビュー後記

調査員として、男性が実子に語るものを書き取らせて頂いた。記憶の奥底に押し込めて忘れていたはずの辛い体験を掘り出して頂いたにも関わらず、語り口はいたって淡々としており、出会ってきた誰をも非難する口調はなかった。誰を責めることもできない、どうしようもない理不尽な境遇に時として人は置かれる。しかしそのような理不尽に直面してもなお、一人の人間としてできる限りの誠心誠意をもって現実を生きるひとつのやり方を、その言葉と態度によって我が子に伝えているようだった。それはもしかしたら男性にとって転機となった数学の先生が当時中学生だった彼に語った時の姿勢と口調に相似るものかもしれないとふと思った。理不尽な現実を受け入れつつそれに屈することなく、知恵と心意気によってあくまで自分らしく生きていこうとするハードボイルドな姿勢が生き様と語り口から伝わってきた。非常に得難く貴重な家族の時間を体験させて頂いた。